

姫路顕栄教会

エピファニー・タイムス

【住所】〒671-1152 姫路市広畑区小松町 4-36

編集責任者 牧師・司祭 ミカエル小南 晃

稔るほど頭を垂れる稲穂かな

だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる（ルカによる福音書 18:14）

「実れる田の面は 見わたすかぎり
穂波の立ちつつ 輝きにおう
垂り穂は色づき 刈り手を待てり
いざいざ刈らずや 時 過ぎぬ間に」
これは収穫感謝を歌った聖歌 213 番の

1 節の歌詞です。そして今、収穫の秋を迎えて郊外の田んぼではこの歌詞通りに黄金色に色づいた稲がたわわに稔っています。既に稲刈りを終えた田もあることでしょう。そして収穫の時を迎えると自ずと神の恵みへの感謝に心が向くのではと思います。

「垂り穂」という言葉

ところで、先の歌詞に「垂り穂」という言葉が出て参ります。これは穂先に稔った籾の重みで稲がしなだれている姿であり、そしてその姿から「稔るほど頭を垂れる稲穂かな」の諺が生まれたのでしょう。

籾の重みでしなだれている稲の姿は、確かに深々とお辞儀をしているように見えます。そしてその意味は「学問や徳を積んだ人ほど謙虚である」ということであり、謙虚であるべきこと、へりくだることの大切さをとてもわかりやすく教えてくれます。

高ぶり、高慢に対する戒め

そして冒頭の聖句は謙虚であるべきことを、イエスが譬えを用いて教えたものです。どのような譬えかというと、聖書の教えに忠実に生きていると自負しているファリサイ派の人と、ローマ帝国のために税金を徴収し、人々から罪人として蔑まれている徴税人が祈るために神殿に上った。

ファリサイ派の人は立って、心の中でこのように祈った。「神様、わたしはほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者で無く、またこの徴税人のような者でもないことを感謝します。わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています（ルカ14:11-12）」

ところが、徴税人は遠くに立って、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら言った。「神様、罪人のわたしを憐れんでください（ルカ14:13）」

イエスは、神様に祈りが受け入れられたのはこの徴税人であり、ファリサイ派の人ではないと語り、そしてこの譬えを通して、「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」と教えられたのでした。

イエスはこの箇所に限らず、しばしば高ぶり、高慢であることを戒めておられます。

今、豊かな稲の稔りに感謝しながら、イエスの教えをこの「稔るほど頭を垂れる稲穂かな」という諺を通して学び、へりくだった生き方に努めて参りたいと思います。

